

知らなかった出版業界の舞台裏

丸島基和の

本の現場から

好評連載中

実務の責を担う副編集長の大きな役割——第五十七回

ナンバー2

普段、何気なく手に取る、1冊の本。

そこには、作家だけでなく、

編集や印刷、販売に携わる人々がいる。

活字からは見えてこない出版の世界を

業界唯一の専門紙「新文化」の丸島基和氏が綴る。

イラスト／エヴァンソン氏



◎新文化とは

日本で唯一の出版業界専門紙。1950年に創業し、販売・流通面に詳しく、出版社・取次会社・書店の動向をビビッドに伝える。出版界の諸事情を1面で特集するなど、その取材力には定評がある。ホームページには日々のニュースが毎日更新され、コラム「社長室」の人気がある。毎週木曜日発行。購読料金は半年間で14,400円(税込)。

新文化通信社ホームページ
<http://www.shinbunka.co.jp/>



丸島基和
新文化通信社代表取締役
1963年生まれ。東京出身。法政大学卒業後、85年にニッパン・ポニーに入社。その後、日本出版販売に転向し、ビデオ・CDレンタルなど複合書店の出店事業に携わる。1989年に出版専門紙・新文化通信社に入社。広告部のあと、編集長を12年務め、2005年に社長に就いた。



ナンバー2に向けた
解説本が人気に

会社や学校、仲間、家族、スポーツチームなど、組織のなかではトップを支えるナンバー2の存在が大きい。会社でも社長が掲げるビジョンをプロジェクトなり、チーム、部署で、かたちにしていくリーダーは多くの場合、ナンバー2の役割です。戦国武将にも影の参謀があり、時代に大きな影響を及ぼしたと伝えられ、歴史小説やテレビドラマでも、時に主役級の扱いでスポットがあてられています。家庭でいえば夫を支える妻がナンバー2であるのかもしれない。

事を「より良く運ぶために」を実践するには何が必要なのか。それを解説した『No.2理論 最も大切な成功法則』が現代書林から発売されました。著者は、メンタルトレーナーで能力開発の魔術師といわれる西田文郎氏。北京オリンピックで金メダルをとったソフトボールチームや、プロ野球の西武ライオンズの菊池雄星選手など、数々のアスリートやビジネスマンのコーチングを行ってきた人物です。脳の仕組みを解説しながら、明確なイメージを沸かせて、くじけそうな心を立て直してやり遂げる、そんなノウハウをナンバー2に向けて上梓しました。

著書は30点ほど。累計発行部数は100万部を超えている隠れたベストセラー作家でもあります。ところで、出版社や新聞社などには編集長と呼ばれる人がいますが、編集部を実際に切り盛りしているのは「副編集長」や「デスク」です。会社の規模が大きくなればなるほど、その傾向は強くなります。雑誌をつくっているのはナンバー2で、週刊誌の編集部には副編集長またはデスクが複数人いる社も。出版業界では、編集長は「人脈」か「金脈」があればそれでいい、なんていわれることもあります。裏を返せば実務は現場に任せて、発行できる道筋をたてる、ということ。出版社の社長に編集長歴任者が多いのもうなずけます。

ナンバー2の存在は経営においても同じ。コスト管理、資金繰り、新規事業などの実務は、社長の側近が行います。

いま、書店の棚が荒れているといわれるのは、実は「社長の番頭さん」といわれていたベテラン社員が不在となったことが大きいのです。出版社とのパイプが太い番頭さんの仕入れ力は、他の社員にはマネができないから、出版社や取次へカオスが利く人たちがいなくなり、元気がなくなつたといわれるようになってしまったのです。

貴方のそばのナンバー2は誰ですか。意外と重要な人かもしれませんよ。

編集部の一コマ

隠れたベストセラー作家・西田文郎

メンタルトレーニングの研究や指導に関して、日本におけるバイオニア的な存在の西田氏。その専門分野を軸足にした『人生を決める3つの約束』(East Press Business)『5%の成功者の「頭の中」』(知的生きかた文庫)などの著書を多数上梓している。

ビジネス界ではパナソニックなどの大企業、スポーツ界ではプロ野球やJリーグのチーム、オリンピックの日本代表チームなどに、指導を行った実績を持つ同氏は「能力開発の魔術師」と評される。だからこそ、著書にも実践に即した生きた言葉が溢れ、感化されて成功への道を拓いた読者も多い。

No.2の理論 最も大切な成功法則

西田文郎 著
現代書林
1,575円(税込)



経営者などNo.1へ向けた著作も多い西田氏の最新作(11月13日発売)は、2番手に贈る一冊。著者が読組組織に欠かさないNo.2のあり方は――。

出版社・新聞社に特有の肩書き

他業界ではあまり使われることのない「デスク」とか「キャップ」の肩書き。「デスク」は、外を飛び回る取材記者に比して、机に向かっていることが多いから付いたといわれる。あがってきた原稿のチェックや取材指示を主にし、現場の責任者という立場。雑誌編集部では、これに副編集長という肩書きを付けているところもある。「キャップ」は最前線でのまとめ役。全国紙の新聞なら政治部首相官邸キャップなどがあり、各取材グループを統括する者を指す。